

も
へ
じ

お化け煙突60年 終… P1 荒川放水路通水百周年 橋と鉄道と通水式—新聞記事
から— P3 「三駅のはじまり」昔のミニ写真展 (お知らせ)… P4

足立史談

第680号

2024年10月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集部
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



「所内報 千住火力」のつづりと最終号
昭和38年7月

元千住火力発電所所員 宮島 弘氏寄贈

— お化け煙突60年 — 煙突は記憶のなかに — 格和宏典

千住火力発電所は、昭和三十八年（一九六三）に、発電を停止し、翌年一〇月に解体着手され、十一月にはその姿を完全に消しました。

千住火力発電所に勤務されていた格和宏典氏にご協力いただき、六六号（令和五年三月）から連載してきた「お化け煙突60年」は、煙突が解体されたちょうど六〇年前に合わせ、今号にて終了となります。

火力発電所としての機能が終了する発電停止は昭和三十八年三月二十二日、「解散式」は五月七日でした。

■解散式 「背広着用のおえ出席すること」。解散式の数日前にお達しがあり、昭和三十八年五月七日（金）、めかし込んだ所員が、「やっぱり作業服があうよなあ」と軽口をたたきながら構内の大型倉庫の特設会場に集合しました。取材用の軽飛行機が煙突の真上を飛び回り、構内にも多くの報道関係者の姿が見受けられました。

先輩の姫野和映氏の著作『お化け煙突物語』によると、「（前略）午前一〇時、木川田社長、竹内常務、火力部長ほか本店関係役員、役職者、歴代の発電所長などが列席するなか、肥後発電所長をはじめ発電所員が整列して行われました。（中略）千住火力最後の肥後所長は十一代目。式次第を恙なくこなし、『蛍の光』が流れる会場から静かに退出した。」とあります。

その後、残務整理要員を除き所員に新天地への異動の発令がありました。解散式に出席した所員がそれぞれの想いにふけり感無量であったことはいうまでもありませんが、その気持ちを文字で伝えたものが無いのが残念です。かろうじて、解散式前後の所報にそれらしき記載がありましたので転載したいと思います。

■所報から職員感想

●機械課作業係 Mさん

…愛着の灯の消ゆる時…

みんなから親しまれたこの煙突も、残り少ない自らの運命を知らなげに今日も黒煙を吐き続けている。最近の新聞やラジオ等によって報道されていた当所もついにきたるべき時がきた。昭和三十八年二月二十五日、所長より歴史的発表の瞬間があった。「東京電灯、日本発送電、東京電力と三代の永い歴史の中を、ただ黙々と働き続け、現在なお老躯に鞭うって最後の努力を日々の黒煙として吐き続けているのだ。（中略）上司と部下との密接なつながり、働く者同士のいたわり合い、真心と愛情の支え合い、それは千住発電所という古い歴史のみによって作り上げられた美徳の歴史であった。（中略）煙突は、自らの運命を知っている。それは、そこに働いている人達が意識しているからだ。永い歴史を持つた千住のそこに働く人達の意志の疎通があったから、煙突自身にも感受

できるのだ。

愛着の消ゆる時、それまではただ黙々と黒煙を吐き続けよう。そして、煙突の下に働くわれわれも、最後の勤めの終わるまで、元気に働き続けよう。それは、千住によって作られた美德の歴史の延長のまま。」

千住火力発電所報28号

(昭和38年3月)

●機械課汽缶係 匿名希望

…失われる風景…

煙の見えない四本煙突は
下町の人々から
だんだん忘れ去られて行く
墨田川のうらがなしい歴史にも似ている

冷然と聳え立つ

鋼鉄のどっしりとしたその逞しさは

老朽化した発電所の

いまは寂しい歴史の象徴

墨田川の川面に映る

四本煙突の投影は

その下で

長い間働いて来ている人達の愛着への郷愁

やがては失われるであろう風景を

何時までも

とどめておこうとする

墨田川の悲しい惜別の記憶―

千住火力発電所報23号

(昭和37年10月)

●(所報) 編集室

「(前略) 新聞(毎日、産経、読

売)、TV(NHK、NTV、TBS)

関係の報道者も会場の内外にその動きも激しく、閉式までスポットの花が咲き、まさに東電の名物下町の象徴千住火力発電所のお別れにふさわしい圧巻であった。当日の感想をA君は、「生まれて初めて社会人としてこの感激を味わったが、千住火力に勤務し、新鋭火力に立ち遅れたあせりもあつたが、このかけがえのない光景を目の当たりにして、改めて誇りとその意義の深さを知った」と述べ、B君は、「感傷的なものではないとはいえ、何か胸をうち、身につまされる思いがした」と…。

千住火力に勤務した二百名からの社員の中には、入社以来今日まで一貫した生え抜きもいれば一年生もいる。しかし、一樣に感情の軽重はあつても、愛着心に変わりはなく、この式典を通じ今後社命のまま、三々五々散っていくであろうが、末永くご発展を祈つてやまない。

千住火力発電所報30号

(昭和38年7月)

■同僚が語ってくれたこと

○生え抜きの私には煙突の煙が沁みついていて、廃止になるのが夢のようなことですが、跡地の利活用で世間の皆さんも注目されているようです。所長が、「お化けセンターとか名付けて後楽園遊園地風な施設もいかな」と冗談で話してくれましたが、煙突は残しつつ、なんらかの手立てを講じて欲しいのですが。

千住火力発電所報30号

(昭和38年7月)

■雑感―連載を終えるにあたって

筆者は平成二十八年(二〇一七)に『お化け煙突のせかい 思い出すままに』と同続編を上梓しましたが、発行部数も少なく、かつての同僚やマスコミ、公共施設への寄贈にとどめたため、広くみなさんに読まれる機会は少なかつたと思います。

令和五年一月(二〇二三)、郷土博物館から、「お化け煙突の発電停止六〇年を迎えるにあたって、発電所内部のことなど「足立史談」で取り上げたい」との投げかけがあり、足立区民のみならず、幅広く御覧いただき、風化しつつあるお化け煙突の姿を再認識していただきたく、拙著の加除修正の形で連載が始まりました。

「足立史談」では、かつての職場の私的な描写などは割愛しましたが、拙著には、新入社員研修ノートや先輩の口伝などからのエピソードも記載してありますので、ぜひご一読賜ればと思います。足立区立郷土博物館(令和七年三月まで休館中)・足立区立中央図書館・国会図書館・都立中央図書館で閲覧できます。

思えば平成二十五年(二〇一三)に郷土博物館にお化け煙突の資料があるようだと言情を得て訪れたのが作品執筆のきっかけだったと思います。

その後、発電所内部を知る語り部が減少していくなか、著名な彫刻家、平柳田中(ひらくし・でんちゅう)の「いまやらねばだれがやる わしがやらねばだれがやる」の言葉に触発されたのかもしれないが、つたない文章であろうと発電所内部の日常を書き留めておこうと執筆と編集に没頭しました。その間、郷土博物館には、ご支援をいただきました。

この最終稿の筆をおくにあたり、「足立史談」の貴重な紙面をご提供くださいました郷土博物館、史談編集局から多大なお力添えを賜り厚く御礼申し上げます。

「お化け煙突」が足立区民の皆様にも末永く愛され、記憶の片隅で生き続けることを念じております。

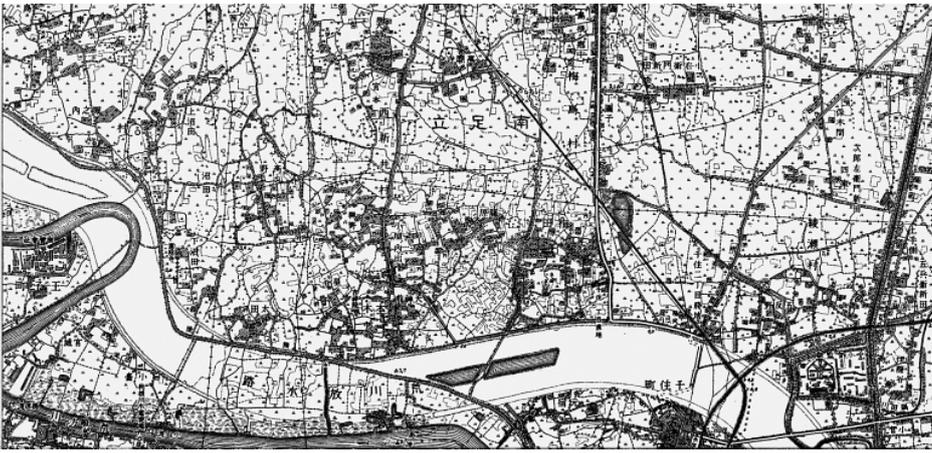
終

(元千住火力発電所員)

荒川放水路通水百周年 橋と鉄道と通水式

—新聞記事から—
郷土博物館

現在、足立区内を流れる「荒川」とよばれる大きな川が、昭和四〇年（一九六五）以前は、荒川放水路とよばれ、開削工事によって人工的に



放水路工事の進む様子（大正8年12月29日発行 大日本帝國陸地測量部）

千住新橋開橋式記念写真 当館蔵
大正13年6月20日



作られた川です。荒川の開削工事は、東京東部地域が明治四〇年（一九〇七）、四十三年と度重なる大洪水の被害を受けたことによって、進められた河川の改修事業です。明治四十四年には、その計画が発表され、浚渫作業と水門工事が完全に終了する昭和五年（一九三〇）まで、一九年かかった大工事でした。今年、放水路の通水から百年目を迎えます。荒川放水路の開削は、地域の人々の生活に大きな影響を及ぼしました。その影響は、実は現在も続いているといえましょう。

今回は、当時の新聞記事から、大正十三年（一九二四）の千住新

橋の開通、鉄道路線、そして通水式についてみてみます。なお、新聞記事については、竹内秀夫氏編集、足立区郷土史料刊行会の発行した『新聞・官報に見る大正の足立』から紹介します。

廿日に開通式の新荒川の大鉄橋

長さ二百五十間、幅は六間

川開き以上の大花火

〔都新聞〕六月十九日号

鉄橋の歩道橋としては東洋一と称されると伝えます。完成とともに北千住方面は非常に発展すると確信し、加藤千住町長始め町の有志が発起人となり、全町を挙げてお祭り以上の祝賀会のため、協賛会の準備や、開通当日は両国の花火大会以上の花火を打ち上げ、毎年この日に上げるといった町長の談話を紹介しています。

「千住新橋」けさの開通式

〔東京朝日新聞六月二十一日〕

「千住新橋」の工事が完成し、二十日、午前十時から開通式が行われたこと、宇佐美知事、その他の来賓多数で、祝辞や功労者に対しての賞品授与が行われたこと、模擬店を開いて盛大を極めたことなどがまとめられています。「一昨年一月に起工してから二年五箇月目で竣工」とあります。

美しい装ひ成つて

けふ千住新橋の渡りぞめ

〔東京日日新聞 六月二十一日〕

「橋の両詰の石柱といひ、両側の青く塗つた欄干といひ、いづれもあつさりとした感じのよいものである」と橋の美観にも触れています。千住側に設けられた式場の祭壇に、神官や楽人が厳かな祭典を行い、協賛会長名倉謙蔵氏の開会の辞、千住町長加藤幸三郎氏の挨拶、吉田技師の工事報告、宇佐美知事の祝辞、府議會議員その他名譽職の祝辞、工事功勞者十五名への賞品の授与した後、祭官を先頭に千住二丁目の菅沼久次郎氏の三代夫婦が従い、要職が楽隊入りで渡り初めをして十一時に式は終了したとあります。この開通式を見ようと押し寄せた群衆「何万」が一面を埋め、各所に太神楽、にわかなどの余興場が設けられ、花火が打ち上げられ、午後からは一層の人数になつたと報じています。

なお、渡り初めの記念写真は「柳下写真館の歴史写真」（足立史談五五八号・平成二六年八月）に掲載されていますのでご覧ください。しかし、この大きな騒ぎには少々反対意見もあつたようです。

千住町民間に非難起る

児童の休校と寄付強請の不法

〔都新聞 六月二十二日〕

開通式当日、千住町内は軒提灯や大国旗を掲げ、小学校生徒は休校とし、旗行列と夜には提灯行列をさせ、

花火の打ち上げもあつてお祭り騒ぎだった。その費用として各戸に五円以上二十円以下の寄付を強要した者がおり、こんな騒ぎに休校や寄付の強要をしたのは不都合だと非難の声もあると報じられています。

御祝いの仕方の是非はともかく、未だかつてない相当の盛り上がりだったことがこの記事からうかがえます。放水路の開削のために、鉄道も対応を余技なくされました。

荒川橋梁工事

(東京日日新聞 大正九年十一月二十二日)

「鉄道省常磐線北千住、亀有間の所謂(いわゆる)荒川河川改修に伴ふ橋梁工事は：(中略)既に橋台、橋脚は完成し、橋桁の架設工事に取掛り居れり。尚内務省側の河川工事は、低水路四百尺、高水式両端各五百尺の設計なれば、之に順応して鉄道も現在の田面より高さ廿三尺、全長千五百尺、中央に二百尺三連、左右六十尺六連、両端三十尺一連の設計、堤防との均衡上、両端は約一哩(マイル)半に亘り土盛り工事の必要を来し、千住駅の如きも平均為し八尺の土盛を為し改築することに決し、両岸工事並に北千住駅の工事は近く着手の予定なり」とあります。平地を走っていた路線に、大川川に対応した大変高さのある橋梁が必要となりました。堤防の高さに合わ

せた橋のため、ゆるやかに線路を上げなくてはならず側下り側とも約二・四キロメートルに渡つてそのための土盛りが必要となること、北千住駅も約二・六メートルも土盛りすることなど大工事の必要が述べられています。

東武鉄道も、橋梁の建設や線路の変更、また当時進めていた複線化のためか新たに土地が必要になり、「官報」(第二五〇号 大正九年十二月十三日)に「東武鉄道株式会社起業敷設事業ノ為収用スヘキ土地ノ細目左ノ如シ」とし、区内各所の土地収用広告を掲載しています。収用広告は翌年三月にも出しています。

東武線一部電化

十月一日から浅草西新井間開始

(東京日日新聞 大正十三年九月二十八日)

浅草から西新井駅までの七マイル余(12キロメートルほど)の電化計画は大正十二年五月に鉄道省の認可を受けて着手していたが、関東大震災のため、工事が遅れ漸く竣工し、十月一日から運転開業をすることとなったという開始予告記事です。

「運転車両は前後部円形で出入口三箇所を有する窓の高い新式のもの、浅草、玉ノ井間は毎十分ごとに西新井間は廿分ごとに発車させる。(中略)：浅草、西新井間の停車場左の如し。

浅草・曳舟(四銭)・玉ノ井(四銭)・鐘ヶ淵(六銭)・堀切(七銭)・千住(十銭)・北千住(十一銭)・小菅(十三銭)・五反野(十五銭)・梅島(十七銭)・西新井(十八銭)」と、新しい駅や乗車賃が発表されています。ちなみに、大正七年の国鉄の入場券が十銭、大正十二年の銭湯の入浴料が六銭です。『値段の風俗史』週刊朝日編)

そして、大正十三年(一九二四)十月十二日の通水式に先立ち「官報」(第三六三九号 十月八日)では、「荒川下流改修工事竣(おわ)る」と題し、規模の大きさ、工事の概要などを述べ、前年の八月二十五日に、千住・西新井間の堤防(※註この場合、川幅のなかに残っていた生活道路の跡などをさす)を爆破し、九月十七日の洪水を新しい川へ誘導できたこと。さらにすでに今年九月十八日の大出水には流量の大部分を

通水させ、計画通り岩淵水門で流量の調節もでき、旧隅田川沿岸は殆ど洪水を見なかつた。と、成功の様子を報じます。

通水式は各紙が報じ、首相はじめ農商務大臣、内務大臣、大蔵大臣(代理)、各次官、東京・埼玉両知事、東京市長、衆議院議長、議員など一千人余りが来賓となり事業の完成を祝つた様子がまとめられています。

未来永劫大東京に洪水は無い
けふ竣工式を挙げる

日本三大工事の荒川放水路

(東京日日新聞 十月十二日)

荒川放水路の竣工式

首相も列席して盛大に行はる

(都新聞 十月十三日)

大洪水から救はるゝ東京

加藤首相以下参列し

昨日通水式挙行の荒川放水路

(東京朝日新聞 十月十三日)

東京日日新聞は、「新放水路の効果については去る十八日の出水で十分証明されたが、今後は明治四十年、四十三年程の洪水でも尾久付近で三メートル五だけ浸水が免かれ得られる理屈になつてゐるから、今後再び洪水の災厄は繰返さずに済むことであらう」という、青山士(あきら)主任技師の言葉を載せています。こうして新聞記事を追うと、細かな事業の大変さ、また、それに伴う人々の喜びがうかがえます。

お知らせ

東武鉄道小菅駅・五反野駅・梅島駅の放水路工事による誕生を記念して、東武鉄道と足立区役所による昔のミニ写真展が開催されます。

日時 10月1日～10月31日
場所 東武鉄道3駅改札内・五反野コミュニティセンター

*改札内は入場券が必要です。観覧時間は駅の営業時間内になります。